

シンポジウム「初期万葉」を終えて

古 橋 信 孝

「初期万葉」という言い方を最近あまり聞かない。初期万葉は記紀歌謡との関連、あるいは詩の発生との関連、つまりいわば文学以前から文学へとも呼べるものへの関心から考えられており、そういうものに関心が向かわなくなっている現代の状況をよく示していると思う。文学史としては、むしろ平安期の和歌との繋がりに向かっている。詩の発生論は論者が文学観そのものを披瀝せざるをえないものだから、どうしても思想的にならざるをえない。その意味で、思想性が弱くなっている状況だといえるかもしれない。しかし、原理的に思考することを避けているとしたら、研究にとって危機的ではないか。研究は作品、史料から始まり、その歴史性、時代の文学性を作品、史料から導かれる必然として論じるものだが、それを時代を超える論理で語るものでなければならぬ。時代を超えるとは、も

ちろん近代的な感覚や思想を超えるということだ。つまり、われわれが生きている時代も歴史化されるものでなければならぬ。近代の文学観、世界観に対して無反省で語るなら、最初から思想が入り込んでいるゆえ、イデオロギー的な研究になってしまう。しかし、われわれは現代に生きているのだから、われわれの言葉にも現代性が忍び込んでおり、それ自体を相対化し続けることは難しい。原理的に考えることは、自分自身を歴史のなかに相対化することになるのだ。

しかし現代問われているのは、原理と考えられてきたことも、やはりイデオロギーではないかということだ。作品や史料に依拠した思考や感受性から原理自体を再構築することが求められている。梶川信行『初期万葉をどう読むか』（翰林書房 一九九五年）はそういうなかで登場して

いる。今回のシンポジウムの企画は、梶川の著書をきっかけとして、まさに現在要求されているものだったといえよう。

シンポジウムは以下の三者のレポートがあり、質疑が行われた。各レポートの論はそれぞれの論文が本誌に載るから詳しくはそれを読んでいただくほうがいい。ここでは、かんたんな整理、位置づけをしておく。

梶川は初期万葉とされている万葉集のなかの作品を、三段階あるのだが、簡略化していえば、万葉集の編者がそのように位置づけたと考え、初期万葉を論ずるなら、もとの姿を復元してみるべきだと主張する。われわれが初期万葉と呼んでいる作品は編者の意図によるもので、その時代の文学史の見方によるものでしかないというわけだ。この論理は正確である。初期万葉の作品を論ずる前提としてのみならず、まさに文学史の再構築へ向かう前提として、なされなければならない基礎である。逆にいえば、そのようにして確定された基礎のうえに何かがみえてくるか、これまでの初期万葉論とどう違うのかが、次の問題としてある。

真下厚は声という問題から初期万葉を考えようとした。歌謡と近い位置にあるなら、うたわれるものとしての性格をもつはずだというわけだ。実際にうたわれたかどうかは

別にして、声の要素が濃いはずで、歌自体をそういう要素からみようとした。先に述べた発生の視点からの論といえる。われわれは書かれて残された史料によってしか論ずることはできないから、声という視点から作品を論ずるのはきわめて困難だ。しかし、この困難さをあらためて抱えることしか新たな文学論は成り立たない。

高野正美は内廷、外廷という制度的な問題から、初期万葉の独特の位置を定めようとした。初期万葉は基本的に内廷の人々の歌で、それが外廷の人々に広がっていくというという構図を出した。歌を詠む人々の層が変わるという考えである。西郷信綱の女の挽歌から男の挽歌へという文学史（『詩の発生』）と通じている。歌にとっていわば外部ともいえる問題を提起したわけだ。文学史は表現の差異から論じられるべきだが、歌の詠み手はその時代に生きた人々だから、表現はその社会と関係しているはずだ。そういう問題の提起として深められるべき問題である。

シンポジウムの各レポートの論と質疑を聞きながら、私自身が考えた初期万葉の問題を述べておく。

梶川のように、万葉集には編者の位置づけがある。初期万葉と呼んでいるものは、万葉集の編者が雑歌、相聞、挽歌の分類をしたうえで、それぞれの歌の歴史を語ってい

るものの近代より以前に位置づけられた歌々である。したがって、万葉集のなかの文学史としての位置づけが必要である。そのとき、編者の考える初期万葉と実際の初期万葉には違いがあるかもしれないから、まず初期万葉の歌々を確定する必要があるというのが梶川の主張であることは先に述べた通りだが、われわれは歴史への態度としても、こういう問題をおろそかにできない。われわれは現代、まずまず歴史への厳密な眼差しを問われている。どこかで入り込んでしまう既成の概念を相対化し、歴史そのものを事実として受け容れる態度は史料自体を厳密に見出す必要があるのだ。文学ばかりでなく、日本とか人間などという概念も歴史においては現代と異なることを前提としなければならぬ。古代の人々の思想や感情はわれわれとはまったく違うかもしれないところから考え始めなければならぬのだ。人間の共通性は成長し死ぬこと、豊富な言葉を持つこと、言葉によって抽象的な思考をすることができると、感情を持続することができるとなっており、親子や夫婦の愛情などではない。古事記や日本書紀、風土記には親子や夫婦について対立的な話のほうが多いことを考えてみればいい。感情をもつことは共通だが、どういうことに対してどういう感情をもつかは文化なのだ。したがって、文化の仕組みをおさえなければその時代のものを論じ

ることはできない。

初期万葉と呼ばれる時代は日本で初めての都市藤原京が成立する以前だから、都市的、つまり共通語による共通の文化を求めつつある時代だといっている。高野が主張する内廷的な歌と外廷的な歌という初期と以降との違いは、都市以前と都市文化という問題にかかわっている。内廷的天皇の宮殿だけの文化、外廷を宮殿を中心とした都市の文化と置き換えれば、都市という問題になる。都市という問題が文芸にとって意味があるのは、さまざまな地域から人々が集まるゆえ、地域を超える共通語、共通の文化をもつということだ。万葉集の歌々はほとんど共通語の歌、都市の歌なのだ（古橋『古代都市の文芸生活』一九九五年、大修館）。庶民の素朴な生活感情をうたった歌などではない。ただ、後の日本文化、日本的といわれるようなものも元になったといえることはできる。つまり、日本文化とは律令制による古代国家の成立以降、各地域の共通性としての文化であって、各地方の生活文化ではない。万葉集の中心的な歌々は共通語の共通の文化の歌だから、われわれにも理解しうる面があるのだ。その意味で、初期万葉は都市成立直前の、都市的な歌になろうとしている歌とでもいえようか。

共通語、共通文化の歌は各地域の生活文化を取り込んで

いく。巻十六に載せられた能登国の歌や越中の国の歌などがわかりやすい典型だ。家持が「東風」と書いて越の方言である「あゆのかぜ」と読ませようとした（一七・四〇一七）のもそうだ。能登の国の歌に方言がほとんどみられないことは、都の人々にわかるように、そしてそのわずかにみられる方言によつて地方性を感じられるように、変化させられたことを示している。そして、越の方言を取り入れながら、「東風」と表記したところに、地方文化の取り入れ方が象徴的にかがえる。表記と言葉の音とのずれに地方性を喚起させる表現をとっているのだ。真下のいう声の問題はこういうところに行き着く。真下は歌がまだ声とともにあつた時代を初期万葉と考えようとしている。声を、身体性、さらに土地の生活に密着した歌と言い換えてみよう。都市化はそこから離れ、別の身体性を生み出していった。それはむしろ都市の歌謡になるだろう。万葉集の時代、『日本霊異記』や『続日本紀』にみられる以外、歌謡がどのようなものであつたかはわからない。平安期の催馬楽や今様などのように、宴や生活で楽しみ、口ずさむ歌謡のことだ。万葉集の歌もその種のものが収められているに違いない。そういう歌謡と歌との関係の問題が明確にされていない。巻十六の歌や遊女がうたつたと題詞や左注に記されている歌など、声とともにあることがわかる歌がそれ

なりの数ある。そういう歌謡と声を排除して書くものになつた歌。歌はうたわなくなることで、むしろ音声を表現に取り込もうとする。それらと歌謡との質の差異はどうか。万葉以前の歌謡と都市以降の歌謡との違いはどのように指摘できるか。

万葉集が東歌に一巻をさいているのは、まさにその声の問題であると思う。表記が言葉の意味より音を記すことに重点がおかれているのが証拠である。この東歌と東国が後進地という像は関係する。都市は遅れという像を地方に対してもたらず。その遅れは侮蔑の対象であると同時に、一方で素朴な人々、疑いを知らない人々、あたたかい人々というような憧憬の像を生む。万葉集が声を求めるとしたら、そういう失われたものの幻想と関係しているはずだ。

このシンポジウムを機会に、初期万葉についての著書の本棚から探して読んだ。私にとつては、やはり西郷信綱『万葉私記―初期万葉―』（東京大学出版会、一九五八年）が最も心を打った。今になつて読めばイデオロギーが先に立つ論だといつていいが、志とでもいえるものが基本にある。日本の文学や社会への深い想いだ。ナシヨナリズムとしてではなく、日本列島に暮らし、日本語を話す者の一人にとつての日本文学であり、日本語である。その想いが先

行すれば、イデオロギーになりかねない。『万葉私記』の書かれた時代はイデオロギーの時代だったといえるかもしれない。しかし、そういうイデオロギーを超えて、これはいい書物だとつくづく思った。想いと、問いの明確さ、そしてそれを表現する文章だと思う。

私は、想いのない文章は好きにはなれない。なぜ万葉集にこんなに深くかかわってしまったのかと考えさせられてしまう、そういう想いに支えられた文章が好きだ。歴史性として読むとしたら、なぜ歴史を問うのかという想いだ。現在、むずかしいのはそういう想いを鎮めながら文章を書くことだと思う。文芸の研究をしているのなら文章に気を使うべきだし、だからといって、文章だけがすべて研究としての普遍性の薄い、自己の想いに重点をおいた文章であってはならない。論文に対しても、イデオロギーだけ取り出して批判したり、いわゆる学的な成果だけをいただけばいいという読み方は、文学研究を貧しくしている。

このシンポジウムの司会を依頼されたおかげで、いろいろのことを思わされ、考えさせられた。これは、現在の研究だけでなく、思想や文学それ自体の状況なのだと思う。